

鳴門教育大学附属小学校英語科の取り組み  
4技能を生かした3・4年生での外国語活動の進め方  
—先駆的かつ持続可能な英語教育プログラム開発—  
第2年次実践報告

青山 祥子 (AOYAMA Shoko)

鳴門教育大学附属小学校

段本 みのり (DANMOTO Minori)

鳴門教育大学小学校英語教育センター研究補佐員

### 要約

鳴門教育大学附属小学校では、平成26年度より鳴門教育大学小学校英語教育センターとの共同研究「先駆的かつ持続可能な英語教育プログラム開発」に取り組んでいる。初年度（平成26年度）は、小学校第3学年に焦点をあて小学校英語科カリキュラムの作成と実践を行った。本年度は、研究2年次として、引き続き小学校第4学年の小学校英語科カリキュラムの作成と実践を行っている。本稿では、本研究の2年間の実践を報告する。

(キーワード：小学校英語教育，4技能，実践報告)

### 1. はじめに

2013年12月13日文部科学省発表の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」によると、2020年度の全面実施に向け、3年生から外国語活動の開始、5・6年生での教科化、高学年の目標には「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」ことを目指されていると記されている。今後は、小学校英語を中学校以降の英語学習へと繋ぎ、子どもの確かな英語力を育成することが求められている。

鳴門教育大学附属小学校では、平成26年度から本大学の小学校英語教育センターとの共同研究として、「先駆的かつ持続可能な小学校英語教育プログラム開発」を行っている。本稿では、その2年間の取り組みについて実践報告を行うこととする。

## 2. 先駆的かつ持続可能な小学校英語教育プログラム開発とは

本大学との共同研究として取り組んでいる「先駆的かつ持続可能な小学校英語教育プログラム開発」とは、3年間の研究期間を設定し、研究対象学年を定め、研究対象学年の授業実践を通して、英語教育プログラムを開発するものである。(表1) まず、平成26年度第3学年を研究対象学年と定めた。そして、「話す・聞く」の技能だけでなく、「読む・書く」の技能も生かした授業実践を行い、本校独自の英語教育のカリキュラム開発を行っている。

本研究は、2つのねらいをもとに共同研究を進めている。1つ目は、「先駆的」という視点から、2020年度の英語教科化を見据え、4技能を統合した小学校英語科カリキュラムを開発することであり、2つ目は、「持続可能な」という視点から、本校の児童の実態にあったカリキュラムであり、今後も継続して実践できることである。

4技能を統合した小学校英語科カリキュラムを開発する目的は、教科型英語教育への緩やかな接続である。5・6年生での教科になった英語教育では、「読む・書く」の技能を習得することが含まれてくる。そこで3・4年生では、アルファベットソングやカードならべなどを行い、遊びの中でアルファベットに親しむ活動を行う。そして、少しずつアルファベットになれることができるようにカリキュラムを開発していくこととした。

本校の児童の実態にあったカリキュラムということは、今後も継続して実践することができる。研究指定の3年間だけでなく、これからも改良を重ねながらよりよいカリキュラムにすることが、本校独自のカリキュラムを構築することに繋がるのではと考えた。

表1 先駆的かつ持続可能な小学校英語教育プログラム開発年度別計画 (研究対象学年)

|      |       | 1年          | 2年          | 3年          | 4年          | 5年    | 6年    | 中1 | 中2 | 中3 |        |     |
|------|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------|-------|----|----|----|--------|-----|
| 研究期間 | 平成 25 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動 | 外国語活動 |    |    |    |        |     |
|      |       | 月1回         | 月1回         | 月1回         | 月1回         | 週1回   | 週1回   |    |    |    |        |     |
|      | 平成 26 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動       | 外国語活動       | 外国語活動 | 外国語活動 |    |    |    | (追跡調査) |     |
|      |       | 月1回         | 月1回         | 週1回         | 週1回         | 週1回   | 週1回   |    |    |    |        |     |
|      | 平成 27 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動       | 外国語活動       | 外国語活動 | 外国語活動 |    |    |    | 新英語    |     |
|      |       | 月1回         | 月1回         | 週1回         | 週1回         | 週1回   | 週1回   |    |    |    |        |     |
|      | 平成 28 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動       | 外国語活動       | 英語科   | 英語科   |    |    |    | 新英語    |     |
|      |       | 月1回         | 月1回         | 週1回         | 週1回         | 週2回   | 週2回   |    |    |    |        |     |
|      | 最終    | 平成 29       | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動<br>基礎 | 外国語活動       | 外国語活動 | 英語科   |    |    |    | 英語科    | 新英語 |
|      |       |             | 月1回         | 月1回         | 週1回         | 週1回   | 週2回   |    |    |    | 週2回    |     |

### 3. 鳴門教育大学附属小学校英語科（平成27年度）の概要

本校英語科の目標と平成27年度の指導体制は次のとおりである。（表2）

|  |  |
|--|--|
| <p>《鳴門教育大学附属小学校 英語科目標》</p> <p>英語を通じて、ことばや文化に対する理解を深め、他と伝え合い、通じ合おうとする意欲や態度を養い、豊かなコミュニケーション能力の素地を育成する。</p> |  |
|--|--|

表2 各学年の指導時間・指導形態・学習場所（平成27年度）

| 学年     | 時間数              | 指導形態                              | 場所                   |
|--------|------------------|-----------------------------------|----------------------|
| 第1・2学年 | 月1時間<br>(年間12時間) | 英語専科教員と<br><b>JET</b> の <b>TT</b> | 各教室での一斉授業            |
| 第3・4学年 | 週1時間<br>(年間35時間) | 英語専科教員と<br><b>JET</b> の <b>TT</b> | 特別教室（英語教室）での<br>一斉授業 |
| 第5・6学年 | 週1時間<br>(年間35時間) | 英語専科教員と<br><b>ALT</b> の <b>TT</b> | 特別教室（英語教室）での<br>一斉授業 |

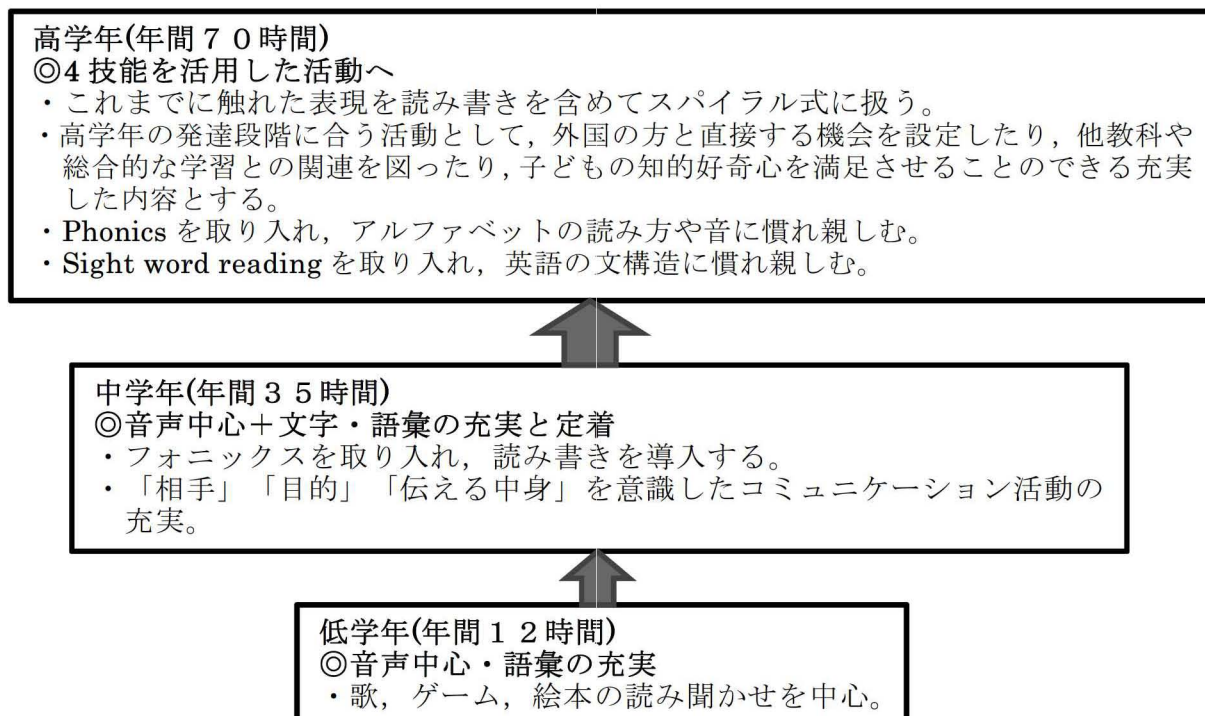
鳴門教育大学附属小学校では、児童に豊かなコミュニケーション能力の素地を育成することを目指している。指導体制については、第1～4学年は英語専科教員と**JET**との**TT**での授業を、第5・6学年では、英語専科教員と**ALT**との**TT**での授業を行っている。主に、英語専科教員が、授業の立案、教材準備を行い、**JET**や**ALT**は、英語力を生かし、発音練習や異文化理解を行う。

また、小学校では6年間で児童の発達段階が大きく異なることから、英語科の目標に加えて、低・中・高学年各段階におけるねらいを設定し指導を行っている。低・中・高学年の各段階におけるねらいと学習内容の積み上げの概要は次のとおりである。

表3 低・中・高学年各段階のねらい（平成27年度）

|  |
|--|
| <p><b>1・2年生のE-Time（英語活動）について</b>・・・年間8時間（月1コマ）</p> <p>○低学年の発達段階を考慮し、絵本や歌など身体を動かす体験的な活動を多く取り入れ、子どもが楽しみながら英語の音声に親しみ、教師や友だちと交流ができる。</p>           |
| <p><b>3・4年生の英語活動について</b>・・・年間35時間（週1回）</p> <p>○現行の外国語活動の目標、3つの観点（積極的にコミュニケーションを図る態度の育成・英語表現への慣れ親しみ・言語や文化に対する体験的理解）に基づいて、コミュニケーション能力の素地を養う。</p> |
| <p><b>5・6年生の英語活動について</b>・・・H27年度年間35時間（週1回）</p> <p>○3・4年生の段階で養われたコミュニケーション能力の素地に加えて、<u>読むことや書くこと</u>を含めた初歩的な英語の運用能力の育成をめざす。</p>                |

表1 低・中・高学年各段階の学習内容の積み上げ（平成27年度）



### 3. 実践研究の実際

本校が実践授業を経て開発した小学校英語科カリキュラムの特徴は、4技能を生かした外国語活動に取り組んでいるという点である。実践研究の実際として、以下の3点を報告する。

- (1) 1時間あたりの授業の流れ
- (2) 平成26年度・平成27年度実践研究報告
  - ①Phonics・アルファベットを用いた活動の実際
  - ②Main Activity 1の活動の実際
  - ③Main Activity 2の活動の実際
  - ④Feedbackの活動の実際

#### (1) 1時間あたりの授業の流れ

4技能を生かすというと、「今日は書くことに焦点を当てて、次の時間は聞くことに…」というように、45分間の授業時間を通してすべてを同じ活動を行うように受け取れとられるかもしれないがそうではない。本校では、45分間の授業を4つの活動に分け、それぞれの活動の中で4技能を生かした指導を行うようにしている。

(表5参照)

表5 4つの活動例

| 時間  | 児童の活動                  | 内容                                       |   |
|-----|------------------------|--|---|
| 10分 | ①Phonics・アルファベットを用いた活動 | ワークシートや歌、カードゲームなどを用いて、文字と音素に楽しみながら慣れ親しむ。 | ← 毎時間10分、授業の最初に行い、子どもたちの負担にならないよう少しずつアルファベットに対する認識を高める。         |
| 10分 | ②Main Activity 1       | ゲームやクイズなどで、英語表現に慣れ親しむ。                   | ← 単元で用いる英語表現を、ゲームやクイズなどで言ったり聞いたりすることにより、楽しみながら慣れ親しむことができるようにする。 |
| 20分 | ③Main Activity 2       | 友だちや外国の方と、英語を用いて関わり、コミュニケーションを図る。        | ← 「相手」と「何を」伝え合うのかを明確にし、子どもたちが、相手意識、目的意識をもって取り組めるようにする。          |
| 5分  | ④Feedback              | 本時の学習をワークシート等に振り返る。                      | ← 振り返りカードは、単元ごとに1つのひとまとまりのものを使い、単元を通して子どもの変容を見取るようにし、今後の指導に生かす。 |

(2) 平成26年度・平成27年度実践研究報告

①Phonics・アルファベットを用いた活動の実際

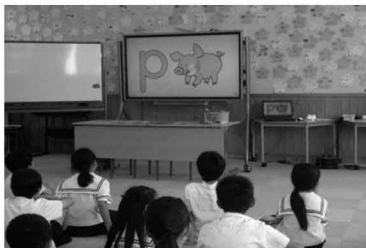


図1 本校が使っている Phonics Song  
※ A.J.Jenkins/KidsTV123(2009)



図2 アルファベットカードをならべる様子



図3 Initial letterと絵の  
マッチングパズルをする様子

授業の最初の10分間を読み書きの導入として位置付け帯活動として、毎時間 Phonics やアルファベットを用いた活動を行っている。

図1は、歌を歌っている場面である。文字を導入するといっても、いきなり書いたり読んだりするのではなく、Name of the letter A B C と Sound of the letter a b c のように、アルファベットの名前と音を両方に慣れ親しんだり、pp pig のように、絵と結び付けたりすることができる歌を歌うことで無理なくアルファベットを口に出し、覚えたり親しんだりできるようにした。

このように歌で音や言葉に慣れ親しんだあと、それをどのような方法で文字と結び付け、定着を図っていくかが大切である。本校では、歌になんじんできたところで、アルファベットカードを用い、26文字の並び方(図2)や、大文字小文字のマッチングなど、実際にカードを動かして、一人一人が少しずつ文字に慣れることができるようにした。初めは戸惑う子どもたちもいたが、毎回10分でも継続して同じ活動を繰り返すことで、少しずつ定着し、自分自身の成長を感じて、「先生前よりすらすらできるようになった」「先生ほとんど覚えた」など、できるようになった喜びを感じる姿も見られた。

アルファベットの文字に少しずつ慣れてきた後、アルファベットの音素に親しむ活動へと移る。そこでは、絵カードとアルファベット(図3)をカルタのようにしたり、神経衰弱のようにしたりして、遊びながら慣れ親しむことができるようにした。



図4 頭文字と言葉の結び付きを意識したワークシート



図5 Three letter wordをつくるカードゲームをする様

最後に、先ほどの歌の歌詞に出てくる動物や物などと、アルファベットと結び付けることができるようなワークシートを用いた。ワークシートの内容は、頭文字と言葉の結び付きを意識したもの（図4）や、大文字と小文字のマッチングを意識したものなどねらいをもって作成し、あくまで少しずつ子どもの負担にならないよう気を付け、文字の認識を高めたり、定着を図ったりした。

そして、現在は(研究対象学年第4学年)、音素を組み合わせ3つのアルファベットの文字で1語になるような活動(図5)を行っている。一つ一つの音素を組み合わせることで、言葉ができることを遊びの中で感じることができるようにしている。今後、この活動をもとに、3つのアルファベットの文字で1語になることにねらいをおいたワークシートを作成し、取り組むことで定着を図っていく予定である。

## ② Main Activity 1 の活動の実際

「Main Activity 1 の活動」では、多くの小学校の外国語活動において行われている、英語表現に慣れ親しむことをねらいとする活動を実地している。しかし、本校の取り組みの中には「4 技能を生かす」ということで工夫しているところがあり、それらを紹介する。

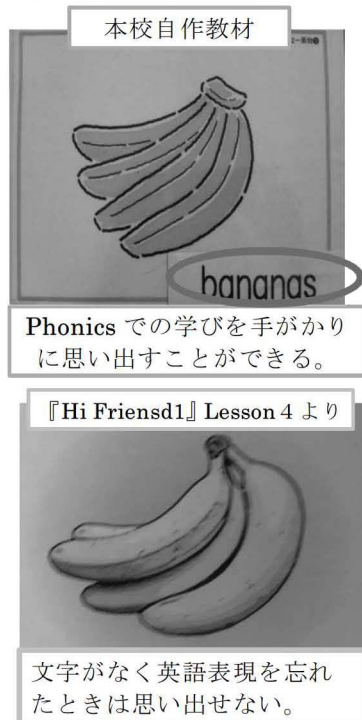


図6 本校で使用している picture card と一般的な picture card

上の写真(図6)は、本校で自作している教具である。下の写真は、Hi friends1 lesson 4 中に出てくるものである。この2つの違いは、文字が入っているかどうかである。文字を入れた教具を使用しているが、「つづりはこう読むよ。」と取り上げて指導するのではない。本校では、文字を常に目にし、絵とともに慣れ親しませることをねらいとしている。それは、①Phonics・アルファベットを用いた活動を通して、児童が自然と頭文字の音を思い出したり、ルールを当てはめて自分なりに読んでみたりすることで、自分で学びを生かすこともねらいとしている。文字が記憶の補助となり、発話の補助となる。同様に、慣れ親しんだ表現を自分で確かめることができるよう意識して教具や板書を作っている。この教具は、会話の流れを、絵や文字で示した教具である。(図7) 単元の中に設定されたコミュニケーション活動までに、十分英語表現に慣れ親しむ時間を

確保しているが、週1時間しか授業がないため忘れてしまう児童もいる。しかし、この教具を子ども同士が英語を用いてかかわり合う場面に置いておくと、自分で英語表現を確かめて口にすることができ、豊かなかかわり合いを生むことにつながった。

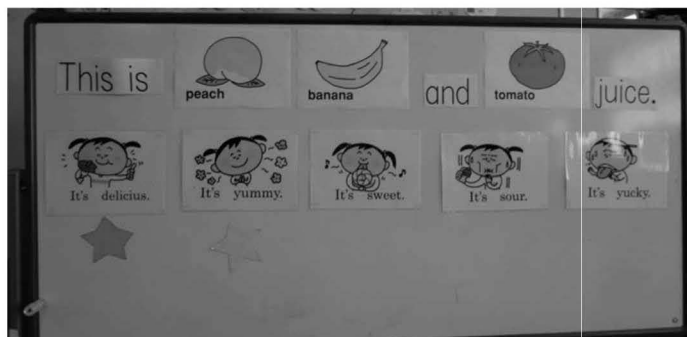


図7 授業の板書例（左）と会話の流れを絵と文字で示した教具

### ③ Main Activity 2 の活動の実際



図8 交流学習の様子



図9 プレゼントを渡す様子

次に、Main Activity 2 の活動の実際についてである。Main Activity 2 の活動は、外国語活動での、コミュニケーション活動である。その中での工夫を紹介する。本校では、児童が誰に何を伝えるのか、つまり相手意識と目的意識を大切に、活動を設定することで、活動にリアリティが生まれ、関心・意欲を高めることができるよう留意して単元を創っている。

この写真（図8）は、対象学年4年生（本年度）の5月、アメリカの Western Carolina University の学生と交流した授業実践である。児童は、アメリカの Western Carolina University の学生に（相手意識）附属小学校のよさを伝えるという目的（目的意識）をもって意欲的に取り組んだ。

児童は、自己紹介をしたり、学校を案内したり、プレゼントを作ったりと、主体的に活動へ参加した。特に、プレゼントを作る時には、書写の学習を生かし、自分が選んだ言葉を日本語と英語で書くという活動を行った。（図9）児童は、相手に喜んでもらうため、また相手が外国の方だから英語で書きたいという思いをもって、熱心に取り組む様子が見られた。

このように、児童が誰に何を伝えるのか、つまり相手意識と目的意識を大切に、活動を設定することで、活動にリアリティが生まれ、関心・意欲を高めることができる。また、活動の中に、英語を書くという活動を積極的に取り入れている。その際、大切なのは児童が相手に伝えたいという思いを持っているかどうかである。書かされているのではなく、目的や思いをもって書く、つまり英語で書く必然性があれば、児童にとって負担にはならないのではということがわかった。

#### ④ Feedback の活動の実際

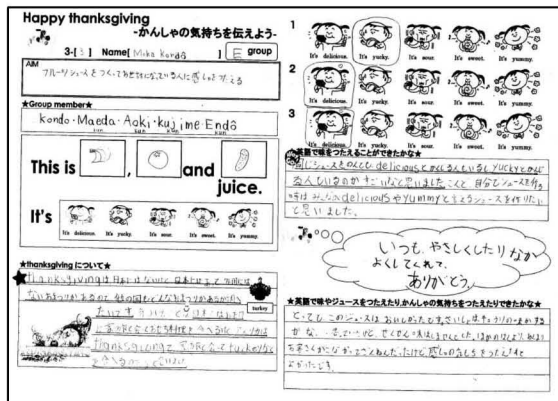


図 10 単元で用いたワークシート

図 10 は、単元を通して使っているワークシートである。単元の流れを一枚のワークシートにすることにより、子どもは見通しを持って取り組むことができたり、自分の成長を感じたりすることができる。

また、この中の一部分を取り上げてみると、自分の思いを伝えるために自然とアルファベットを書き写している児童がいることがわかった。(図 11) ワークシートの中に単元で用いる英語表現を書きしておくこと

で、書き写したり、口に出したりして、自然と文字に親しむことができるのではと考え、今後も継続して取り組んでいく予定である。

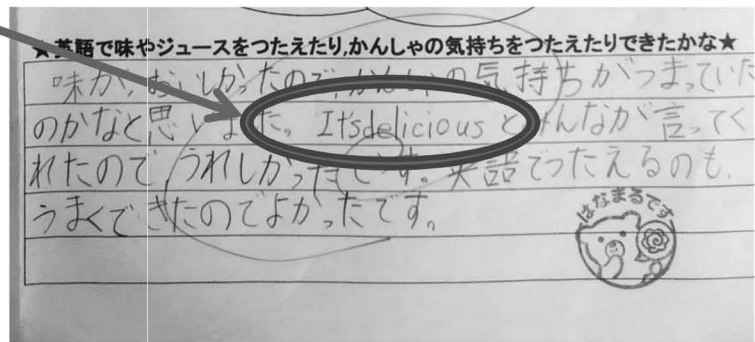
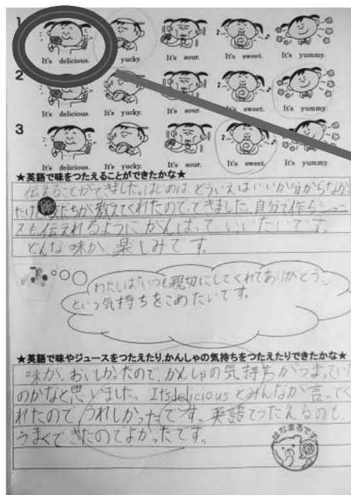
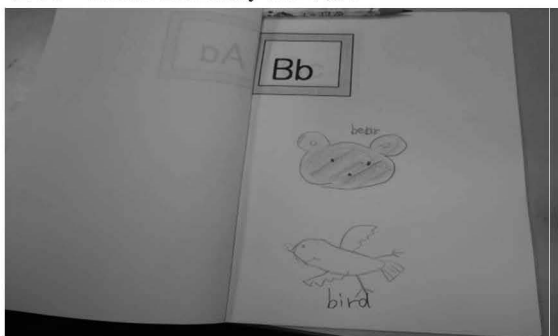


図 11 児童のワークシートより



図 12 Picture Dictionary をかく様子



英語活動の中で、児童はたくさんの単語に親しむ。しかし、それは自分の体験として力になるが、目に見える形で残すことは難しいだろう。

そこで本校では、その時間に慣れ親しんだ英語表現を **Picture Dictionary** に残す活動を行っている。(図 12・13) この活動は、とても便利で時間があれば三単語、時間がなければ一単語というようにその時々に合わせて使うことができる。

また、現在 4 年生になった児童の中には、3 年生の時に書いた自分の絵や文字を懐かしんだり、現在の自分と比べたりして、自分の学びの蓄積を感じ、喜ぶ子もいた。

以上が、研究 1 年次、2 年次の研究実践の報告である。2 年間の研究成果として、① 中学年の発達段階に応じた小学校英語科カリキュラムの作成と実践、② 4 技能を生かした活動の実践に取り組み、今後の礎となる試案の作成と実践ができたと考えている。



#### 4.今後の研究計画

本研究での2年間の実践における成果として、以下の2点がある。

- 1 3・4年生での外国語活動をベースとした英語教育カリキュラムの作成
- 2 本校の取り組みを「鳴門教育大学小学校英語教育センター シンポジウム」において発表し、県内外の英語教育に関心のある方に報告した

今後、この研究成果をふまえ、最終年次の研究計画を以下のようにまとめる。

##### ①教科化に向けて、高学年でのカリキュラム開発

高学年でのカリキュラム開発として、本年度（平成27年度）秋から、市販のテキストを用いて、読むことへのアプローチをスタートしている。

##### ②中学校との連携

今年の3月に本校を卒業した現在の中学校1年生の追跡調査を行っている。また、来年度に附属小学校・附属中学校の両方に勤務する教員を配置する予定である。

##### ③評価の方法を検討

これからは評価の方法を考えていかなければならない。現在、本校の実態にあったCan-doリストを作成している。また、中学校の前倒しではなく、長期的視野に立った児童一人一人の成長を測ることができる評価の方法を大学と連携し、研究開発していくこととしている。

研究2年間での成果をふまえ、最終年次は高学年での英語教育をどのように展開していくのかを考えていく必要がある。実践と評価が関連付けされたカリキュラムを開発するため、今後は大学との共同研究体制をより一層深め、理論に伴った評価の方法や評価の観点を作るようにしていく。また、小学校での英語教育と中学校での英語教育のスムーズな連携を図るために、両校をつなぐ役割を担った教員を配置していく予定である。そして、研究最終年次の終わりには、「先駆的かつ持続可能な英語教育開発カリキュラム研究」として、今後の英語教育に沿ったカリキュラムができるよう励んでいきたい。